

# 浄光寺の歴史

浄光寺住職 能美紹隆



慶念は豊臣秀吉の朝鮮出兵に従い戦争の悲惨を目撃し、帰国後のちがけの開教に従事し、石見一円に教線を張り現在のご法義繁盛の基礎を築きました。

## 慶念は三人兄弟

記録によると慶念は三人兄弟の一人で、一人は本願寺西国の古刹として有名な市木浄泉寺（朝枝姓）を、今一人は大朝圓立寺（能美姓）を継いでいます。第十三代誓応も浄泉寺より入寺していることから、浄泉寺を拠点にして次々と教線をのび



浄光寺発祥の地

し、現在の石洲門徒が形成されていた様子が伺えます。誓応は後に国府金蔵寺に入寺しています。

## 第十一代祥応の時代

浄光寺中興の師と仰がれる第十一代祥応の時、現在の九間四面の本堂が建立（一八三三年）されました。その折の記録に、七ヶ寺の末寺と十数名の役僧（弟子）の名が挙げられています。浄光寺を拠点にして教線を張り、石見の法田があたたく耕されていたことが伺えます。

生涯をお念仏一筋に生きた、浄光寺門徒の有福の善太郎さん（農家）や近くの跡市の小武善右衛さん（禅宗・村長を務め

る）のような妙好人が誕生したのも祥応の時代であります。

## 第十四代白英の時代

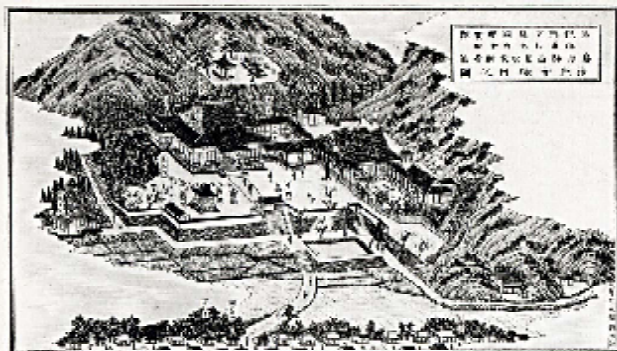
第十四代白英は、本願寺第二十一代明如法主より破邪顕正係を任せられ、明治に活躍した大洲鉄然・島地黙雷らと共に鹿児島・長崎をはじめ九州諸県を命がけて開教するなど、本願寺教団の発展に大きく寄与しています。浄光寺には大洲鉄然・島地黙雷の書簡や明如上人の御親筆が数多く残されていることからその親交が伺えます。

また、白英は、浄光寺



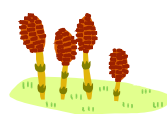
都野津 浄光寺説教所

から四キロ離れた海辺の都野津の地に布教活動の拠点として浄光寺説教所建立を計画。多くの門信徒の労力奉仕によって完成を見たのは、白英没後の明治二十五年秋のことです。



150年前の浄光寺境内図

# 伝道教化活動の拠点に



浄光寺説教所 都野津 浄光寺会館



(当山第14代白英の碑)

説教所の境内には当山第十四代住職白英師の功績をたたえて石碑が建てられている。明治二十二年七月三十一日往生。享年五十三歳



説教所を活用しよう!

おみのりをよるごぶ道場  
青少年の宗教情操教育  
お年寄りの憩いの場  
地域の「ミニミニ」の場  
葬儀は説教所で

# 浄光寺説教所概観

## 浄光寺第十四代白英師によって建てられる

浄光寺第十四代白英住職のとき、本願寺教団の発展と布教の功勞により、

本願寺第二十一代明如法主より、数多くの染筆の軸物と越後の大寺「鳥屋野山浄光寺」に因み、「鳥屋野山」という山号、「浄光精舎」の額字及び額面を賜る。

白英師は越前の国「唯宝寺」石丸了因の長男として生を受け、明治九年に当山に入寺。明如法主より破邪顕正係りを任せられ、大洲鉄然・島地黙雷らと共に鹿児島・長崎を始め、九州諸県を開教。

明治十三年には明如法主より本願寺宗政編製を委嘱されその任にあたる。同年に東京教務所管轄、同五年には京都教務所管轄に就任。又、鹿児島別院建

立や東京別院再建の責任者としても従事している。

明治十八年に、都野津説教所の一角（現在の庫裡に相当する部分）にあつた建家（友澤教会）が、浄光寺住職の管理下になる。その建家は白英師によって明治十三年に本願寺説教所として本山登録がなされている。白英師は明治二十年に布教活動の拠点として、その場所に浄光寺説教所（約八百坪）建立を計画推進。

白英師の御法ひろまれかしの深い願いと、門信徒の方々の燃ゆるようなご報告によって、明治二十五年九月十六日、ついに本堂・庫裡・境内地の完成を見るに至った。現在の説教所の場所は殆んど

家もなく荒れた砂浜であつた。浄光寺の支坊である説教所が海浜地域に建立されるということ、当時は今のようないかな道具がない時代に、当地域の門信徒総出のもと、バケツやおいこ・もっこう等を手に手にして、土を随分遠くから運んで境内地全体を固くし、正面と西側に土塀を造り門を建て、現在のような説教所が竣工。多くの人の心のよりどころとなる間法の道場が完成したと、門信徒一同手に手を取ってよるこび、感激の涙を流したそうである。

## 法灯継承 (歴代住職)

開基	1	1	代	應
2	1	2	代	福
3	1	3	代	誓
4	1	4	代	願
5	1	5	代	正
6	1	6	代	靈
7	1	7	代	白
8	1	8	代	林
9	1	9	代	春
10	1	9	代	應

(現住)

(若院)